

## II 主題への取り組み

### 1. 主題設定の趣旨

本校は、昭和60年度より研究主題を「発達と障害に応じた教育をめざして」サブテーマを「個に視点をあてた指導の実践」と定め、児童・生徒一人ひとりにおいて最も必要な指導上の課題を取り上げ、一人ひとりの児童・生徒を対象とした事例研究を3年間にわたり実践してきた。この研究実践では一人ひとりの児童・生徒の現在の発達段階を的確につかみ、発達のつまづきや壁を探してそれらを克服したり乗り越えさせたりするための手立てを考えたり、発達の偏りを軽減したり、矯正したりする手立てを考え、個に適した教育内容を適した方法で指導してきた。すなわち個々の児童・生徒が現在の課題を克服しそれぞれの目標に近づいていくために、指導者は言語面、情緒面、健康面、自立面等それぞれが様々な方法で指導を行なってきた。しかしこれらの指導を進めていく中で、どのような障害を持つ児童・生徒にとってもまずからだをしっかりとつくる必要があるということに気づいた。すなわち、児童・生徒の発達の遅れや障害の偏りを考えた場合、言語面、情緒面、自立面等の発達を促すもとなるからだをつくる必要があるということである。更に、ある一面からのアプローチだけではなく、多面的な指導をしていく必要があるという考えに至ったのである。

そこで本年度は、研究主題を引き続き「発達と障害に応じた教育をめざして」サブテーマを新たに「からだづくりを通して」と定め、個が当面する課題に応じた根底の力となるからだづくりを進めていくことで、発達の遅れや障害の偏りに迫り、問題点を改善していくことにした。

### 2. 主題に対する基本的な考え方

#### (1) 「発達と障害に応じた教育」とは

「発達に応じた教育」とは、発達の遅れに対応した教育ということである。知的発達、身体的発達における遅れに対して、現在の発達段階を的確につかみ、発達のつまづきや壁を探してそれらを克服したり乗り越えさせたりするための手立てを考え、実践する教育である。

一方、「障害に応じた教育」とは、発達の偏りに対応する教育を指す。例えば、極端な他動や固執、てんかんを持つ児童・生徒の発作、脳性まひ児の身体機能における不随意運動等、単に発達の遅れという視点だけではとらえられない問題がある。このような問題を軽減したり、矯正したりする教育も必要であり、それらを指して「障害に応じた教育」ととらえている。

しかし、発達の高い段階においては、発達の遅れなのか偏りなのか区別できないこともある。そのような意味もあり、「発達と障害に応じた教育」というふうにあつたつを合わせた形でとらえるように主題名を設定した。

さらに、「発達と障害に応じた教育」の中での「応じる」という言葉の意味について附記しておきたい。「発達と障害に応じた教育」とは、発達の遅れに対し発達を促進させたり、発達の偏りを矯正、克服するばかりの教育を指すのではなく、現在備わっている力をどのように生かすかということも重要な課題となってくる。つまり「応じる」とは個々の児童・生徒の現段階における発達の程度、障害の程度を認めた上で、どのように備わっている力を使っていくのか、どのように社会参加を目指していくのかといった現実的な視点も含んでいるのである。

## (2) 「からだづくりを通して」とは

### ①障害児の特性と本校の児童・生徒の実態

障害児は一般に全ての機能や発達に著しい遅滞がみられ、かつ未分化な状態にある。そのため心身の調和的な発達がうまくいかず、多動、言語発達の遅れ、筋の緊張や協応力が乏しい、社会的不適応等様々な問題が生じている。また健常児にくらべ、体格、体位、運動能力等も一般に劣っている傾向にあり、更に運動の経験が不足しているため、感覚や知覚の発達、自己の動きや表現、概念形成、社会性等の発達が遅れている場合が多い。

次に本校の児童・生徒の実態であるが、図①からもわかるように障害が重度化、重複化の傾向にありそれに伴ってコミュニケーション能力の不足社会的不適応、多動等の問題をかかえている児童・生徒が見られる。

また、図②に示す体力診断テストの結果例を見ても、体格・体位は健常児と比べさほど劣っていないにもかかわらず、本来潜在的に持っているはずの力が発揮されていなかったり、機能的に十分働いていない児童・生徒が少なくない。これらのことが身辺処理能力、進んで行動する力、集中して学習に取り組む力、長時間作業に取り組む力等に大きく影響しているようである。

主な重複障害 (延数)

(単位:人)

障害	ダウン症	言語障害	情緒障害	自閉的傾向	てんかん	視覚障害	運動機能障害	代謝異常	その他
人数	10	19	2	12	8	4	5	1	6

知能段階の分布 (WISC-R等)

(単位:人)

学部	段階	重 度	中 度	軽 度	境 界 線
小学部		1	8	3	0
中学部		7	11	2	0
高等部		5	12	9	3
計		13	31	14	3

《主な重複障害と知能段階の分布一図①》

氏名	性別	学年	身長 (cm)	体重 (kg)	握力 (kg)		肺活量 (cc)	背筋力 (kg)
					(右)	(左)		
A	男	小6	138.4	28.6	16.5	17	900	16
B	男	中1	157.4	46.4	24	22	1450	31
C	女	中2	149.8	35.6	9.5	8.5	測定不能	0
D	女	高1	157.5	52.8	15	12	910	0
E	男	高2	186.0	77.3	31	28.5	測定不能	0

《体力診断テストの結果例一図②》 (S63.4実施)

・参考

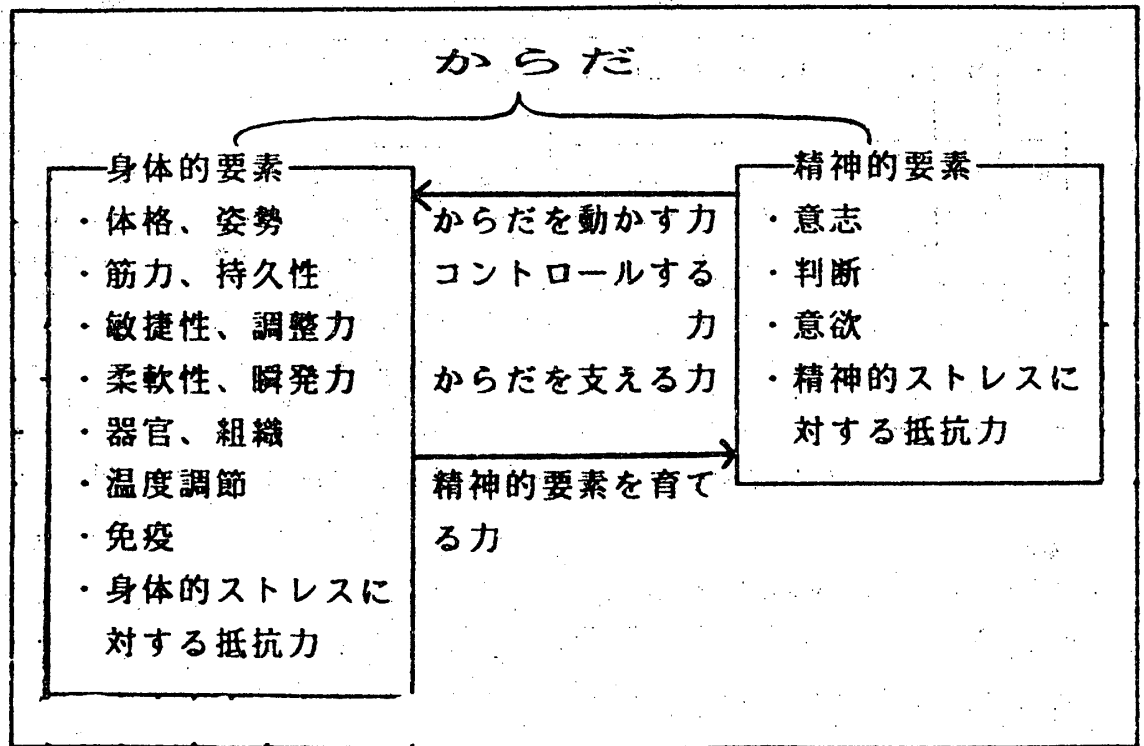
鳥取県の児童の身長・体重の平均値

学年	性別	身長 (cm)	体重 (kg)
小6	男	149.7	40.9
中1	男	158.0	47.8
中2	女	156.4	49.7
高1	女	157.7	53.4
高2	男	170.3	61.8

(昭和61年度学校保健統計調査報告による)

②からだをどのように考えたか

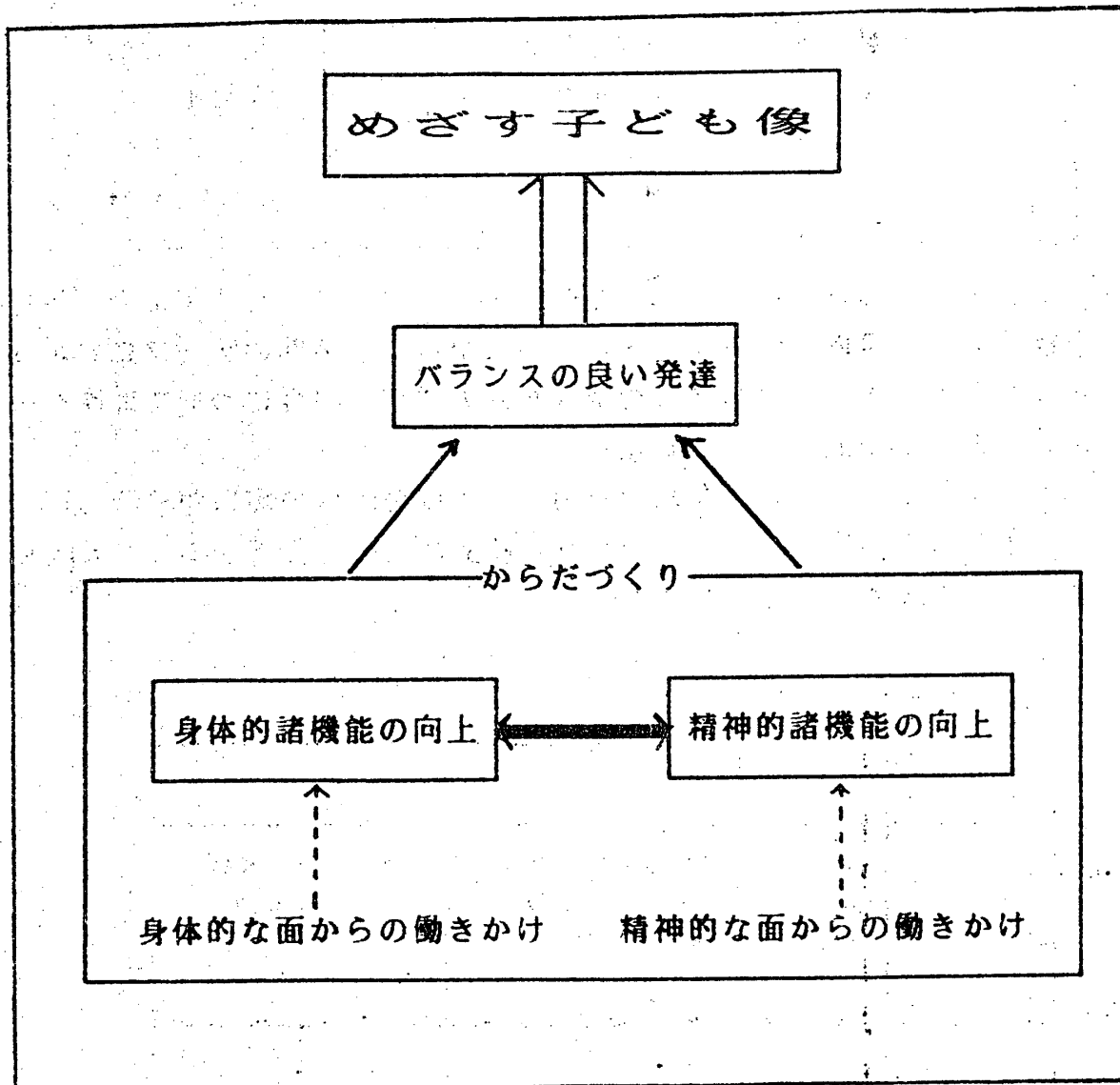
一般にからだといった場合、手や足、体幹等の外から見えるいわゆる肉体そのものを指している場合と、手や足がよく動く、脚や腰のバネが良い、からだ全体のバランスが良いといった主として機能的な面を指している場合との二通りが考えられる。しかし、物体としてのからは、不随意的動きは別として、それ自体では決して十分な機能をはたすことができない。このからだが十分機能をはたすためには、必ず目的や手段を考える等の意識の働きが必要であり、意識によるコントロールも不可欠である。また、気分、情動、感情等もからだの動きや働きに大きな影響を与えている。そこで本校では、からだを単に肉体そのものとしてだけ考えるのではなく、精神的な要素も含めた総合的なものとしてとらえた。



《本校のからだのとらえかた一図③一》

③「からだづくりを通して」目指すもの

本校におけるからだづくりは、先に述べた考え方からもわかるように、走、跳に代表されるような体力、運動能力、病気予防等の健康、安全面だけでなく、からだの身体的な面、精神的な面へ様々の方法で働きかけ、総合的に調和のとれたからだをつくることを目指している。これにとどまらず、こうしたからだづくりを通して、個々の児童・生徒がかかえている発達の遅れや障害の偏りを軽減し、それによって個々のもつ課題の解決を目指そうとするものである。



《からだづくりを通してめざすもの一図④》

### 3. 本年度の取り組み

本年度は「からだづくりを通して」というサブテーマの初年度にあたる。本校の児童・生徒の実態をふまえながらからだ、からだづくりで目指すものを話し合い検討しながら共通理解を図ってきた。そして小、中、高の各学部ではその発達段階や関連、系統性を考慮し、それぞれ次のような学部テーマを設定し、研究を進めた。

小学部 学部テーマ 「からだを動かすことを楽しむ子」	⇔⇔	中学部 学部テーマ 「生き生きと行動する子」	⇔⇔	高等部 学部テーマ 「進んで運動を楽しむ子」
----------------------------------	----	------------------------------	----	------------------------------

小、中、高の各学部ではこれらのテーマのもとに児童・生徒の実態把握指導形態、指導内容の検討等を行ないながら、各学部のテーマにむかって研究を進めてきた。（各学部の取り組みの詳しい内容については次ページからの各学部の取り組みを参照）

またからだづくりにかかわるものとして校舎内外の環境整備にも目を向け、廊下に歩行用の白線を引いたり、校庭に鉄棒を設置するなど現在も環境の整備を進めているところである。

### 今年度の研究の取り組み

	4	5	6	7	8	9
実施 事項		・本年度の取り組みについての共通理解 ・研究会	・各学部での取り組みの決定 ・各研究会	・全学研究会(口) ・研究会	・各研究会	・全学研究会(口) ・研究会
月	10	11	12	1	2	3
実施 事項	・全学研究会(口) ・研究会	・研究会	・各研究会 ・研究会大会	・各研究会	・研究会	・本年度の取り組みの振り返り